The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 不安な社会情勢における日本語とタイ語のSNSでの会話の分析ーCOVID-19に関する会話をデータとしてー |
| Author(s) | Charoenpong, Supanun |
| Citation | 大阪大学, 2023, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/92241 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　CHAROENPONG SUPANUN　） | |
|---|---|
| 論文題名 | 不安な社会情勢における日本語とタイ語のSNSでの会話の分析<br>-COVID-19に関する会話をデータとして- |

論文内容の要旨

本研究では、新型コロナウイルスが世界中に蔓延しているコロナ禍の状況において人と会うことが制限される中で、SNS（Social Networking Service）がどのような意味を持ち、どのようなコミュニケーションが行われているのかを考察するために、SNSを用いた友人同士のチャットコミュニケーションを分析する。

2019年の末から現在（2022年12月）に至るまで新型コロナウイルスが世界中に拡大し、人々に様々な影響を与え、深刻な事態を引き起こしている。外出時のマスク着用や、手洗い、うがいの習慣化等、生活様式が変わり、人々は多少なりとも不安を抱えているだろうと予測される。また、新型コロナウイルスの蔓延による深刻な事態が人々の生活に与えた影響の一つに、家族や友人と対面で会うことができなくなったことが挙げられる。スマートフォンの普及により、チャットメッセージが重要なコミュニケーションの一つとなっているが、コロナ禍では、チャットメッセージの重要性がますます増していると考えられる。

そこで、本研究では、友人同士のSNSのチャットコミュニケーションにおける不安・不満など好ましくない状況に関する会話を研究対象とし、SNSの会話の特徴について、タイ語と日本語のそれぞれの言語の連鎖組織及び参加者の相互行為の特徴、そして言語表現の分析と考察を通して対照する。その上で、コロナ禍において、人と会うことが制限されるような状況で、SNSで行われているコミュニケーションが参加者にとってどのような意味があるのかを解明することを目的とする。

タイ語と日本語の会話に関して、チャランポン（2020）では、悩み語りの会話において、タイ語母語話者の悩み語りの聞き手は【からかい】、日本語母語話者は【共感】で応じる傾向があるということが論じられている。その違いをきっかけとして、本研究では、悩み語りだけでなく、タイ語と日本語の不安・不満など、好ましくない状況に関する会話について研究する。また、タイ語と日本語それぞれの言語の特徴を探り、その類似点・相違点を明らかにすることによって、タイ語を母語とする日本語学習者への日本語教育の一つの手がかりになると良いと考える。

本研究で分析するデータとしては、SNS上のCOVID-19に関する友人同士の好ましくない状況に関する会話における連鎖組織及び言語表現、参加者の相互行為の特徴を探ることを目的とするため、親しい間柄におけるCOVID-19に関する話題のネガティブな内容のチャットの会話を収集した。

データ収集の時期は2020の7月から11月までで、協力者に、COVID-19に関する不安など好ましくない状況に関するSNSでのチャット会話の画面を撮影して、協力者の自己判断で会話の始まりから終わりまで送ってもらうよう依頼した。協力者は日常でソーシャルメディアを利用することが多いと予測される大学生・大学院生を対象とした。データとして、10代～50代までの日本人の大学生・大学院生16名、タイ人の大学生・大学院生43名によるLINEなどのチャット会話のデータを、日本語のものを59会話、タイ語のものを85会話収集した。

分析方法については、まず、会話のやりとりを連鎖組織として分析するために、全ての発話を行為として捉えて発話機能のラベルを付けた。発話を抽出する際、基本的にSNSでの一つの吹き出しを一つの発話として捉えるが、一つの吹き出しに複数の文がある場合、一つ一つの文をみて、それぞれに発話機能を付けた。また、スタンプや写真も一つの発話と捉えた。その後、各発話がポジティブな内容か、ネガティブな内容かを文脈から判断し、ポジティブとネガティブそれぞれの〖+〗と〖−〗というラベルをつけて、話題がどちらの方向に向かうのかを探った。なお、タイ語のデータは日本語に直訳して提示している。

データの各発話に発話機能とポジティブ〖+〗とネガティブ〖−〗のラベルをつけた後、会話の全体を連鎖組織に分けて、発話の連鎖を分析した。また、それぞれの連鎖組織の内容を見て、その連鎖組織のやりとりの目的を文脈から判断し、ラベルを付けた。今回最も注目したのは、**〔安否確認の部分〕**、**〔不安共有の部分〕**、**〔不満共有の部分〕**である。

以下、本研究の結果をまとめる。

まず、本研究では、チャット会話のデータの種類を≪**〔安否確認の部分〕**がある会話≫と≪**〔安否確認の部分〕**がない会話≫に分けて分析を行った。

≪**〔安否確認の部分〕**がある会話≫は、≪**〔安否確認の部分〕**から始まる会話≫と≪**〔挨拶の部分〕**から始まる会話≫、≪**〔不安共有の部分〕**から始まる会話①≫、そして≪**〔不満共有の部分〕**から始まる会話①≫の4つに分類した。

≪**〔安否確認の部分〕**がある会話≫では、両言語とも**〔安否確認の部分〕**が会話の開始の場所など早い位置で行われていたことが観察できた。≪**〔安否確認の部分〕**から始まる会話≫以外でも、比較的早く安否確認が行われていた。また、安否の確認ができるとそのまま会話が終了されていたことも見られた。このことから、いずれの言語においても、**〔安否確認の部分〕**が最も重要な部分であることが考えられる。相手の安全が確認できると、次に会話の参加者によって、**〔不満共有の部分〕**などネガティブな方向になるか、**〔からかいの部分〕**などポジティブな方向になるか、もしくは、**〔雑談の部分〕**など中立の方向に展開していくかということになるが、もう既に不満を共有する部分がある≪**〔不満共有の部分〕**から始まる会話①≫と≪**〔不安共有の部分〕**から始まる会話①≫の種類以外、必ず、**〔不安共有の部分〕**または**〔不満共有の部分〕**というネガティブな方向に展開していくということが観察できた。

また、日本語では**〔不安共有の部分〕**が行われていることが多かった。これはコロナが人類共通の好ましくない出来事であり、皆多少なりとも不安を抱いているからだろう。お互い同じ立場、同じ気持ちである相手とやりとりをすることで、自分の不安を共有しているのではないかと考えられる。一方、タイ語では、**〔不満共有の部分〕**が行われていたことが多かった。不満は【文句】などの悪口に移行することが多いため、不安を述べるより会話の雰囲気が悪くなる恐れがある発話だと考えられるが、タイ人は個人主義で日本人のように集団を考えるのではなく、自分中心に考えている（フォーンサターポーン：2012）ため、雰囲気が悪くなるのを怖がらずに溜まった不満を解放しているのではないかと考えられる。いずれにしても、コロナに関する会話では、同じ立場、同じ気持ちである相手とネガティブな気持ちを共有することが重要視されていると考えられる。

しかし、今回の会話データの主な話題はコロナに対するネガティブな話題だが、両言語ともネガティブな発話を行うばかりでなく、【笑い】、【からかい】、【励まし】、【思いやり】などポジティブな発話も行っていることが観察できた。さらに会話の最後にプラスの期待や現在の状況の良いところなどを情報提供して、前向きでポジティブな結末に展開していくことがある。特に、日本語もタイ語も笑いを誘うような発話が見られた。その笑いの誘いについては両言語とも前の発話を契機に、ネタとして未来への期待や現状のいいところを述べたり、からかいをしたりポジティブな内容の発話を行うことでポジティブな話題へと展開しており、最終的に笑いを誘って、ふざけて楽しい雰囲気で会話を終わらせる傾向がみられた。

次に、≪**〔安否確認の部分〕**がない会話≫は、≪**〔不安共有の部分〕**から始まる会話②≫と　≪**〔不満共有の部分〕**から始まる会話②≫の2つに分類した。

≪**〔不安共有の部分〕**から始まる会話②≫では、≪【不安表明】から始まる会話≫と≪【予定変更】から始まる会話≫の2つに分けることができた。≪【不安表明】から始まる会話≫では、日本語では、相手の不安な気持ちを共有するために、【理解】、ネガティブな内容での【評価】そして【共感】をしていた。そこでは、それらのネガティブな反応によって、会話の方向性としては最初から、最後までネガティブな発話が続いて行われるという傾向が見られた。しかし、≪【予定変更】から始まる会話≫では、会話の参加者はすぐに次の予定を提供し、新しい約束をしようとする態度を相手に見せるようにしていた。そこでは、やりとりがネガティブなやりとりから前向きな結末に展開していた。一方、タイ語では、≪【不安表明】から始まる会話≫において、不安を共有した後、会話の参加者は会話の最後に面白く笑いを誘う【からかい】・【冗談】、または【思いやり】をしていた。そこでは、会話としてはネガティブなやりとりばかりが続いていたわけではなく、途中で会話がポジティブな方向に展開して、

ポジティブな内容でやりとりを終える傾向があった。≪【予定変更】から始まる会話≫では、不安を共有した際、タイ語母語話者はその後、今の状況に対する不満を共有したり、相手を慰めてから解決方法を提供したりしていた。そのため、会話の参加者の行為によって、会話は最初から最後までネガティブな内容のままでやりとりが終わる場合もあり、ネガティブな内容からポジティブな内容に展開して会話を終える場合もあった。

最後に≪〔**不満共有の部分**〕から始まる会話②≫では、≪【不満表明】から始まる会話≫と≪【現状説明】から始まる会話≫の2つに分けることができた。日本語では、不満を1つの隣接ペアで共有すると、すぐに会話を別の話題に展開しようとしていた。展開していった話題がポジティブな話題であったため、会話が一気にネガティブな内容からポジティブな内容に展開し、会話をポジティブな気持ちで終えていた。一方、タイ語では、不満表明の話し手が【不満表明】をすると、聞き手は【不満表明】や不満のような内容の【現状説明】などネガティブな応答をして、お互いコロナによる様々な不満を共有していた。そのため、会話が最初から最後までネガティブな内容のままであった。

以上、日本語の〔**安否確認の部分**〕がない会話では、会話の参加者は不安と不満を共有した後、状況がいつ収まるかわからないものの、冗談や新しい約束への提供など、楽観的な態度を相手に見せるようにする傾向があった。一方、タイ語では、不安を共有した後は、会話の参加者は会話の最後に面白く笑いを誘うなどポジティブな発話を行う傾向があった。しかし、不安共有とはまったく異なり、タイ語母語話者は不満に対して、【不満表明】などネガティブな発話で応答し、お互い様々な不満を共有していた。

次に、言語表現の分析結果をまとめる。日本語では、ポジティブな内容の発話を表すのに、「安心」、「うれしい」、「よかった」など様々なバリエーションのポジティブな言語表現を用いていた。一方、タイ語は日本語と比べると、あまりポジティブな言語表現を使用していなかった。そのため、タイ語では、その発話がポジティブかどうかを見極めるためには、ほとんどの場合、会話の発話機能から判断しなければならなかった。また、今回のデータから会話の参加者は様々な言語的な方法を使って、言葉による遊びを行うことで、会話に真面目過ぎない少しふざけた印象を与えていることが観察できた。言葉による遊びは様々で、日本語の方がタイ語よりバリエーションが多かった。

一方、ネガティブな言語表現においては、日本語もタイ語も、不安・不満を表すのに、「ゾッとする」、「怖い」、「大変」などネガティブ言語表現を使用していた。しかし、日本語の方が言葉のバリエーションが多かった。また、不安・不満を表すのに、ネガティブな言葉表現を用いること以外に、日本語とタイ語は「第三者の言葉を引用する」、「大げさな比喩を使用する」など様々な言語的な方法を使っていることが観察された。また、日本語では、「不安」と「不満」に対して、多かった反応の一つは【共感】である。会話データから、【共感】をする際、終助詞の「ね」が頻繁に用いられていることが分かった。「ね」を付けると、その共感を強く表すことができると考えられる。

続いて、スタンプ・絵文字・顔文字に関して、タイ語はスタンプを多く使用していた。一方、日本語は絵文字を多く用いていた。両言語の共通点は、日本語母語話者もタイ語母語話者もネガティブな発話の後に、「顔文字と感情：Smileys & Emotion」の絵文字を用いる傾向があることと、現在の大学生・大学院生は、SNSで顔文字はもうあまり使用していなかったことである。

最後にSNSにおける会話の意味を考えてみると、友人同士にとってSNSは、平時には雑談やおしゃべりをする場かもしれないが、異常事態における会話では、相手の安否を確認する重要なツールになる。また、コロナのような人に会うのが困難な状況では、SNSで不安・不満な気持ちを分け合って、感情を共有することに加えて、気持ちが楽になるように言葉による遊びを行う場面としての役割を担っているのではないかと考えられる。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（ チャランポン　スパーナン　 ） | | | |
|---|---|---|---|
| 論文審査担当者 | | （職） | 氏　名 |
| | 主 査 | 教授 | 筒井　佐代 |
| | 副 査 | 教授 | 岸田　泰浩 |
| | 副 査 | 准教授 | 高井　美穂 |
| | 副 査 | 准教授 | 日向　伸介 |
| | 副 査 | 本学名誉教授 | 宮本　マラシー |

## 論文審査の結果の要旨

審査対象の論文は、コロナ禍の状況において人と会うことが制限される中で、SNS（Social Networking Service）がどのような意味を持ち、どのようなコミュニケーションが行われているのかを考察するために、SNSを用いた友人同士のチャットコミュニケーションを分析した、大変時宜を得た研究である。チャットコミュニケーションが重要な手段となっている現在、日本語教育にもチャットコミュニケーションの指導が必要ではないかとの問題意識から、日本語と申請者の母語であるタイ語の対照研究として研究が行われており、チャットコミュニケーションの分析自体が少ない上に、他言語との対照研究が管見の限り見られない現時点において、大変先駆的な研究として評価できる。

分析データとして、大学生・大学院生によるCOVID-19に関する話題についてのLINEアプリ等を使用したチャット会話でのやりとりを、日本語59会話、タイ語85会話収集し、会話分析の手法を用いて、発話の連鎖組織と会話の構造、発話内容のネガティブ／ポジティブの区別と言語形式、スタンプ・絵文字・顔文字の使用の観点から、詳細に分析している。

会話の構造の分析では、〔安否確認の部分〕〔不安共有の部分〕〔不満共有の部分〕という三つの部分に注目し、〔安否確認の部分〕がある会話とない会話に分けて、会話の構造の特徴を分析している。〔安否確認の部分〕がある会話では、いずれの言語も早い段階で安否確認を行い、その後日本語は〔不安共有の部分〕、タイ語は〔不満共有の部分〕に展開する傾向が見られた。〔安否確認の部分〕がない会話では、〔不安共有の部分〕で開始する場合は不安を共有できると会話が終了する、あるいはさらに不満も共有することが見られたが、〔不満共有の部分〕で開始する場合は、日本語では不満を共有すると会話が次へ展開していたが、タイ語では〔不満共有の部分〕のみで会話が終了することも珍しくなかった。このことと関連して、会話内容のネガティブ／ポジティブの方向性について、日本語では、〔安否確認の部分〕がある会話では特に傾向はなかったが、〔安否確認の部分〕がない会話では、次の約束をするなど楽観的な態度を表してポジティブな内容で会話が終わる傾向が見られたのに対し、タイ語では、〔安否確認の部分〕がある会話ではどちらかと言えばポジティブな内容で終わり、〔安否確認の部分〕がない会話ではネガティブな内容で終わる傾向が見られた。特に、タイ語の場合、不満表明に対して不満表明で応答する傾向があり、〔不満共有の部分〕の会話はお互いコロナ禍の様々な不満を言い合って終始ネガティブな内容で進行していたことが特徴的であった。ただ、両言語とも会話の途中で冗談やからかいなど、おもしろく笑いを誘うような発話も見られ、また言語表現として言葉遊びを行ってふざけた印象を与え、深刻になりすぎないような工夫を行っていた。言語表現において、日本語に特有なのは「安心していけるようになったら絶対行こう」などの意向形による誘いや「ね」を用いた共感、子ども言葉やオノマトペ、古語の使用であったが、一方タイ語ではからかいの様々なバリエーションや種々の罵倒語が特徴的であった。さらに、スタンプ・絵文字・顔文字については、タイ語の方がスタンプが多く、主にポジティブなスタンプが使用され、絵文字は日本語のネガティブな発話の後ろに多く使用されていた。

これらの分析から、コロナ禍における友人同士のチャットコミュニケーションは、相手の安否確認のツールとして、また不安や不満を共有するツールとして使用されており、日本語では不安について詳細に共有するが不満についてはすぐに話題を変える一方、タイ語では不安も不満も多く共有するという傾向が指摘されている。それに加えて、多くの会話がポジティブで前向きな結末に展開していたことや、言葉遊びやスタンプ、絵文字等の使用による

ふざけた印象から、コロナ禍の人に会えない状況の中で、気持ちが楽になるようなコミュニケーションとしても重要な役割を担っていると考察されている。

データ収集の方法として、調査協力者の判断でチャットの会話を区切って提供してもらったことにより、会話の開始と終了の判断が協力者任せになっている点、分析についても、会話の構造とネガティブ／ポジティブの内容および言語形式は相互に関連し合っているが、それぞれを分けて分析しており関連付けて論じ切れていない点など、研究としての限界や不十分な点はあるものの、チャットコミュニケーションの分析に会話分析の手法を使用するという新しい試みに果敢に挑戦したこと、またコロナ禍の渦中にあって、コロナ禍でのコミュニケーションに関する研究もなされていないという段階において、このような研究に取り組んだことは、大変意義のあることであり、コロナ禍の人々のコミュニケーションの記録という意味でも資料価値の高い研究であると言える。このような研究が可能となったのは、申請者の高度な日本語運用能力はもとより、一見多様なデータを緻密に分析し、結果を一般化してまとめることのできる申請者の研究能力の賜に他ならない。

以上のことから、論文審査担当者は、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位にふさわしい優れた博士論文であると判断し、全員一致で合格との結論に達した。